

浦島太郎

お母さんと二人暮らしの心優しいダウン症の浦島太郎。

ある日、子供たちにいじめられていた亀を助けた。

後日、釣りをしていると、その亀が現れた。

「竜宮城にいらっしやいませんか？」

「竜宮城？」

「ええ、貴方を特別にご招待します。私の甲羅の上にお乗りなさい」

太郎は、亀に乗り、海深くの竜宮城へ行った。

たくさんのご馳走や美女に囲まれたが、太郎はどこか不安げ。来て早々に言った。

「お母さんが心配するから帰ります」

欲望には目もくれず、お母さんをとった。

帰りに、乙姫様から、玉手箱を貰った。

「決して開けてはダメよ」

村に戻った太郎は、その雰囲気の違いに驚いた。

家に戻ると、ボロボロに古びていた。

「お母さん」

お母さんと呼ぶと、現れたのは、一人のお婆さん。

「太郎かい？」

お母さんは、太郎に再会できたことが嬉しくて、泣き崩れた。

「貴方がいるだけでいいの」

「僕もお母さんがいるだけでいい」

「でも、なぜ貴方は年をとっていないの？」

太郎は、竜宮城の話をしたが、お母さんは信じてくれなかった。困った太郎は、竜宮城で貰った玉手箱をお母さんに渡した。

「開けちゃダメって言ってたよ」

「開けてはいけないお土産があるものですか」

お母さんは、げげんそうに玉手箱を受け取った。

「そうだ、太郎。貴方に朗報があるの」

「何？」

「ダウン症の特効薬が開発されたのよ！」

「僕、治るの？」

「まだ試験中だけど、試してみる？」

「うん、お母さんが喜ぶのなら」

太郎は、特効薬を試したが、数か月間も意識がなかった。

「先生、太郎の意識は戻るんですか？」

「分かりません」

「一生、意識が戻らなかったらどうしよう……」

お母さんは、わらにもすがる思いで、禁断の玉手箱を開けてしまった。

すると、白い煙が出て、お母さんが、若返った。太郎がいなくなった頃の若さ。

その直後、太郎の意識が戻り、二人は歓喜に沸いた。周りは年をとってしまっていたが、二人は元通り。しかも、ダウン症が完治した。太郎とお母さんは、手に手を取り、涙した。

「玉手箱は、僕の唯一の願いを叶える箱なのかも」

「竜宮城に行って良かったね」

「人生のやり直しだ」

太郎は、前よりもお母さんを大事にし、幸せをかみしめた。

「幸せすぎて怖いや」

了